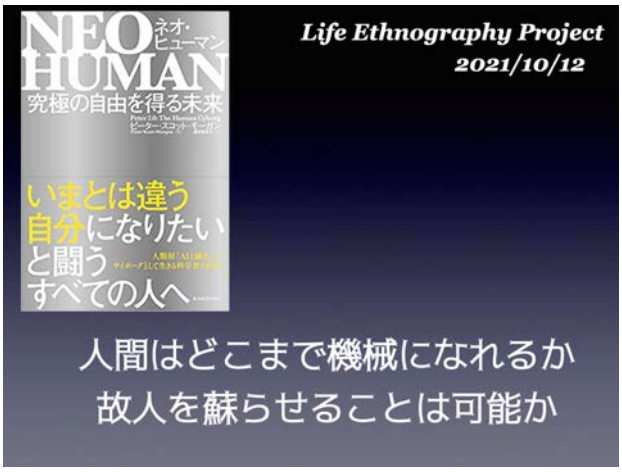
2021年度活動報告書　ライフ・エスノグラフィー・プロジェクト（小林昌廣）

■ 主な活動

講義と読書会

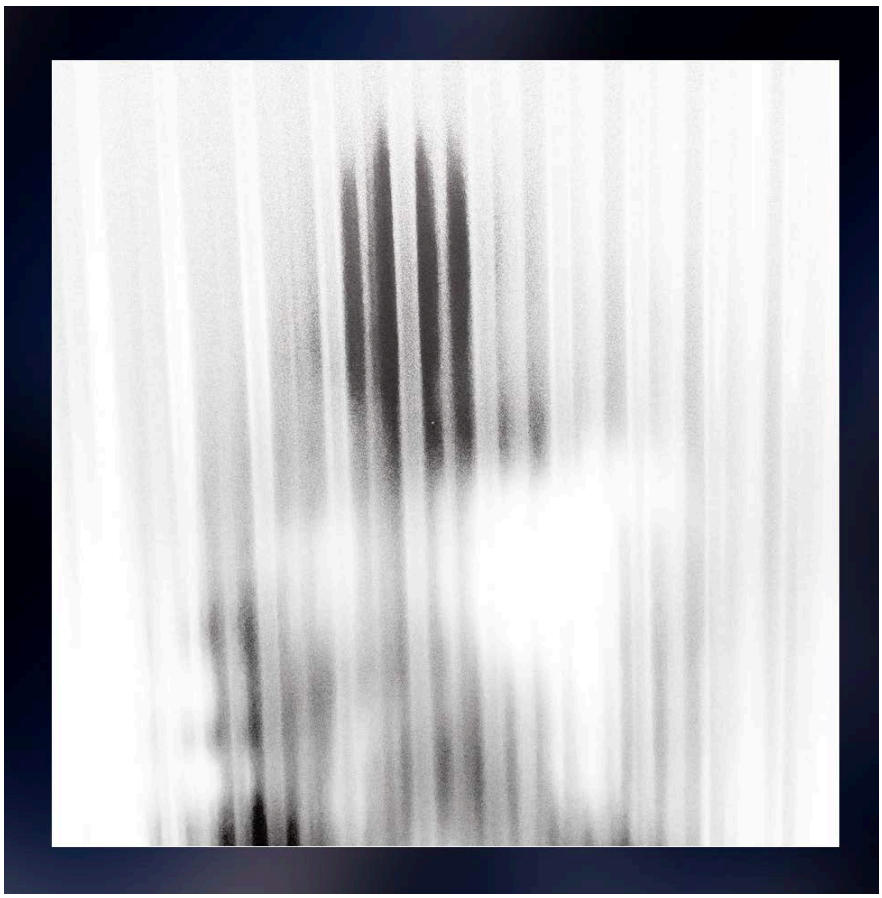


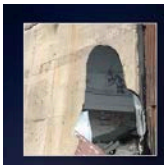
発表（IAMAS2022展）

全体テーマ：このたび、IAMAS(イアマス)は「IAMAS 2022」と題し、第20期生による修了研究発表会および 2021年度のプロジェクト研究発表会を開催します。本展覧会とはコロナ禍と呼ばれる時代に悩み、議論し、作り上げた修士作品を社会に問う場であり、一つの大きな区切り――「あがり」の契機とも捉えられます。私たちが「あがる」ためには、この困難の時代を共にしたIAMASに関わるすべての人の協力が必要であり、本展覧会はその全員の参加を以って、「あがり」を祝す儀式としてあります。

プロジェクト・テーマ：「しなゆ」
https://sites.google.com/iamas.ac.jp/lep-for-iamas2022/top?authuser=0

しなゆ（萎ゆ）という現象を、腐敗、侵食、破壊といった「死の間近」という立場から視覚化してそこから得られるであろう「得体の知れないなにか」を抽出する。





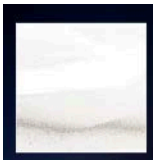
た、すなわち、いち

命 空き家 AR

「た、すなわち、いち」は生きている人に、どちらでもある曖昧な姿である、朽ちている空き家の写真をARフィルターで重ねた作品である。命は生と死、どちらでもある曖昧なものであるはずなのに、私たちはそのことを普段意識しない。朽ちているものの姿を重ねることで、どちらでもある姿を浮かび上がらせる。

修士1年
小林 玲衣奈

2021年3月 金城学院大学国際情報学部国際情報学科グローバルスタディーズコース卒業。景観や風景に興味があり、なぜ人は風景をテーマにするのかをリサーチ中。景観や風景への興味とあそびやワークショップへの興味を組み合わせられないかを考えている。



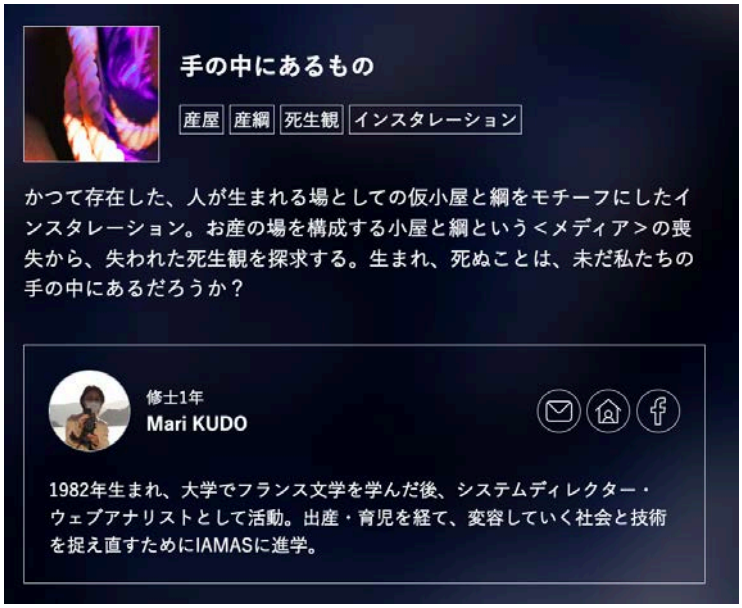
流転

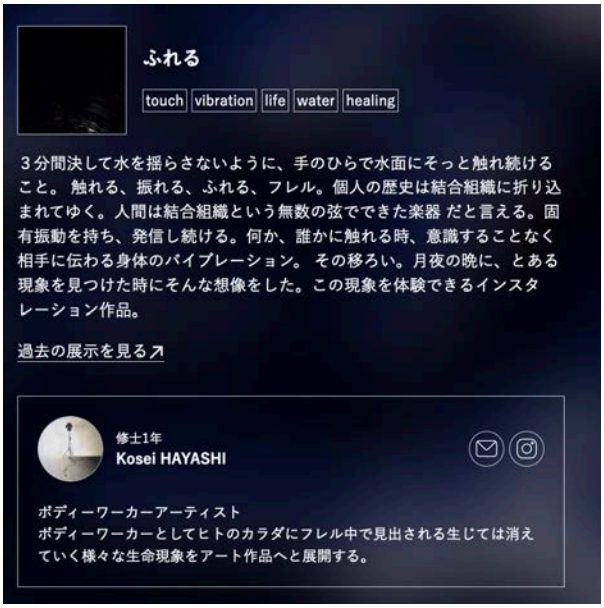
砂 生命 インスタレーション

砂山には安息角というものがある。
石英片岩である硅砂の山は、35度前後の角度以上には積み上がらない。
そのため「35度前後」がこの砂山にとっての終わりである。
しかし、砂山にとっての終わりは砂粒にとっての終わりではなく、流れ落ちた砂粒は次の砂山を生み出していく。
途方もない時間をかけて運ばれ世界を巡り続ける砂粒は、流転する生命のように終わりを迎えることはないだろう。

修士1年
有賀 まなみ

散り散りの場所から流れ着いたマテリアルを拾い上げることで、異なる文脈を持つ物語同士が出会うことによって生じる関係性を探究している。
現在は流転する普遍的なマテリアルとして砂をテーマに作品制作を行なう。





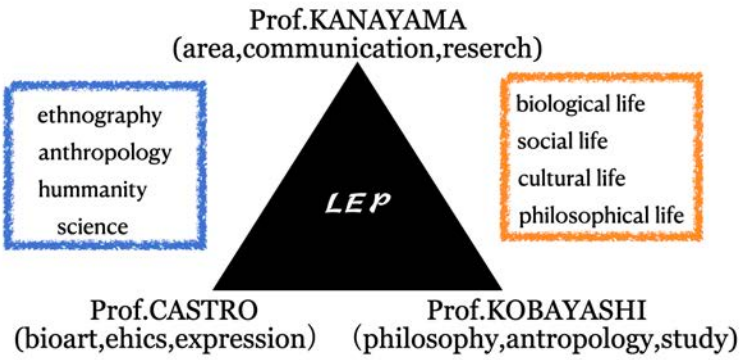
岐阜おおがきビエンナーレ2021

https://www.iamas.ac.jp/biennale21/

タイトル：「ＬＩＦ ―― Ｅ !?」

主旨：2004年から開催されてきた「岐阜おおがきビエンナーレ」。9回目となる今回は、アート、哲学、化学、生物学、宇宙生物学からのアプローチを集結し、「生命らしさ」に対するモダニズム／ポストモダニズム思考を超えることを目指します。

小林昌廣がファシリテーター及び講演を担当

講演タイトル：いのちの対話

講演梗概：生命とは何かという定義は生命とは何でないかという問いを同時に出来させることになる。そこで「生命と非生命」のあいだにあるものとして人造人間、ヒューマノイド、サイボーグ、ロボットなどいろいろに表現される存在について考えてみる。神が自らの姿に似せて人間をつくったように、人間もまた自らに似せて人造人間をつくりたかった。その欲望の最初はゴーレムという泥人形が最初かもしれない。ゴーレムは人間的な感情が湧いた瞬間に、少女の幼い悪戯によって土へと還ってしまう。同じように少女との幼い花遊びに興じていたフランケンシュタインのモンスターは、図らずも少女を殺めてしまう。フランケンシュタイン博士の「生命の錬金術」によって蘇ったモンスターは雷光学の象徴がなせる技であった。一方、メトロポリスのマリアは、雇用者と労働者の階級闘争に破綻を生じさせるつもりだったが、人造人間だとバレて、火炙りにされてしまう。フランケンシュタインのモンスターも焼き殺されてしまうが、人間によって作られたものは、プロメテウスが人間に与えた火によって滅ぼされてしまうのだろうか。否、「R.U.R.」のロボットたちは、人間を滅ぼして自分たちだけになったときに種族が繁栄できずに危機に瀕していた。その時互いに愛し合う二体のロボットが登場して、ロボット界のアダム とイブとなった。しかし、ロボットやサイボーグには性差がないからこそ、サイボーグ・フェミニズム宣言がなされたりするのであり、また彼らに寿命を与えないことは「生政治」の課題を裏返しにしてしまう威力をもつことになる。いずれにせよ、生命とは何かを 問うことは、現存在である人間を「死に向かう存在」と常に捉えることで、生と死の矛盾的同一の場面に人間を置くことに他ならないのである。